

【懐かしかった飛鳥】

王寺観光ボランティアガイドの研修会が10月31日（下見）、11月28日（研修会・本番）に開催する事になった。

私は「飛鳥」と聞いて「ああ、懐かしいな！」と思い、下見、本番共に参加することにした。約40年前の1978(昭和53)年から1988(昭和63)年の10年間橿原市に住んでいた。そこは「飛鳥」に一番近い「橿原ニュータウン（白橿地区）」で、私の年齢が40～50歳だった。私が橿原に入居した5年前の1972年に高松塚古墳の発掘調査が始まっていて、3月21日にはあの極彩色壁画が出現すると言う大発見だった、26日に発表され、田舎の飛鳥村は一躍、日本考古学史上の脚光を浴びるようになっていた。

会社（新聞社）でも「三宅さん、高松塚古墳の飛鳥の近くに家を買ったらしいな、考古学が好きな仲間が高松塚古墳を見に飛鳥に行こか、と言っているが、三宅さん案内してくれるか」と言われた。私は「高松塚古墳はあれほど新聞に大きく説明されているので私が説明する事はない、橿原に引っ越して何回か『飛鳥銀座』（飛鳥資料館・飛鳥寺・入鹿首塚・水落遺跡・亀石・酒船石・石舞台など）行っていたので案内出来る、専門的な説明は出来ないが一般的な事はしますよ」特に水落遺跡（天知天皇の水時計）は得意にしていた。会社の考古学仲間の最初は7、8人だったが、その後も社内の人に声をかけて何回か来てくれた。最後はOB会の「毎日あゆみ会」が40人で来てくれたのを嬉しく案内、説明したのを思っている。（若くて元気な時代は、何でも次々おぼえることが出来、懐かしく思っていた）。橿原で私が住んでいた家の斜め向かいには「毎日放送、ラジオウォーク」レギュラー解説者の猪熊先生（現・京都橘女子大学教授）、奈文研の町田先生（故人）が近くに住んで居られ。ラジオウォーク・レギュラーの青山先生（故人）毎日新聞・考古学担当者らが猪熊先生の家に来られていた。

先月の研修会で行って説明して頂いた「藤原京跡」には、思い出があり、広い野球場になっていて、奈良県南地区の少年野球の大会があった。橿原に転居してしばらくした時分に、次男が3年生で少年野球のチームに入ったので「お父さんもコーチになってください、と監督に言われた」と言うので「お父さんは会社の仕事が忙しいので、あまり行けないので、都合がついた時にいきます、と監督さんに言

っといて」と次男に言っておいた。土曜、日曜日を都合つくように、土曜日夜勤の時朝から野球に行き、夕方に会社へ。金曜日夜勤、夕方に



優勝旗を先頭に場内行進



優勝祝賀会での6年生

会社へ、土曜日午前仕事、午後野球に行き、正確なキャッチボール、内外野のノック、バットの素振り、ゴロとフライの取り方、ランニングなど野球の基本を根気よく練習させて、あまり勝つことの無かったチームが徐々に勝つようになり、子供たちは目を輝かして頑張るようになってきた。そこで、監督、コーチ陣は私に「ヘッドコーチになって」と、次の年には「監督に・・・」と言われ2年間監督をして、藤原京跡を会場とした大会など各地の大会で次々優勝して選手（子供たち）皆さんに喜んで貰った。

私の次男（主将で優勝旗を持っている）や6年生が卒業して中学生になった。その時期に我が家に「白橿中学PTA推薦委員会のメンバーが三宅さんにお話がありました」と、「三宅さんに

P T A会長をお願いします」と言われ、どうしてと聞くと「新入生の父母さん達が言われるには自分の子供は『親の言う事は聞かないが三宅監督の言う事は聞く』と、言われています。「そういう人にP T A会長をお願いしたいです」と言われ、断り切れず3年間中学校のP T A会長をした。王寺・美ヶ丘に転居したのは昭和63年4月に下旬だった。王寺・美ヶ丘に来て自治会副会長6年。民生児童委員12年。観光ボランティアガイド6年になる。檀原市に住んでいた時は若くて元気で、飛鳥観光ガイドは、すぐに憶えられ、少年野球も一生懸命できた。3年間中学校のP T A会長。檀原市の10年間は懐かしく楽しく思い出す。現在王寺町に30年住んでいる、檀原の時より老齢のため元気は無く、観光ガイドは、すぐに憶えられず、でも檀原の3倍素晴らしい。何年生きるか楽しみたい。

三宅 茂樹

山添村めぐり

全国観光ボランティアガイド 奈良
「記紀サミット」と銘打って、観光ボラン
ティアガイドの全国大会が2月5、6日
に開かれた。5日は橿原市のホテルで全
国から約600人が参加して基調講演
「おもてなし」と六つの分科会に分かれ
てのディスカッションなど盛大に行わ
れた。2日目の6日は県内の名所旧跡を
14のコースに分かれて参加することに
なっていて王寺からは色々な所に参加
したが、一番多い7人参加の「山添村・
奈良市コース」をレポートした。



集合場所の「奈良市商工会議所前」か
ら大型バス「奈良交通」に乗り込んだ。
出席点呼の後、スタッフの方から「山添
村に行く途中は雪が積もっていますよ」
と言われ、「へー 本当ですか」とバ
スの中は驚きの声。バスは東大寺の近く
から志賀直哉旧邸がある高畑を過ぎて
しばらくすると山道に入ってしまった。

そこで、スタッフのガイドの奥谷さん
がマイクを持って「奈良市や皆さんのお
られるところは、メジャーな観光地。し
かし、山添村には、鉄道もコンビニも何
もありません。市町村合併は、村民投票
を行い「合併はノー」ということになり
ました。しかし、当時県下市町村で実質
公債費比率が2番目に高く、借金が54億

円もありました。村長、助役、教育長の
給与20〜17割削減、村会議員の報酬も
10割削減など行財政改革を推進。また各
種団体の助成金を削減や廃止。しかし、
こんなことばかりでは元気が出ません。
観光ボランティアの会などを中心に村
の『羽宝さがし』を行い、農業と結んだ
観光事業の推進などに取り組み、今では
借金は16億円までになりました。

話を聞いている間に奈良市を過ぎて
山添村に入ってきた。少し行くと「この
交差点にある信号機が山添村ただ一つ
の信号です」と聞き、驚いたあと、車窓
から見える風景は山肌上添うようにた
たずむ小さな集落が点々と見え、家の敷
地は広く、近くには機械できれいに刈つ
た茶畑がある佇まい。今どきスーパー、
コンビニが1店も無いと聞き驚いた。

初めてバスを降り案内されたのは「歴
史民俗資料館」だ。県文化財の指定を受
けた旧春日小学校講堂を活用し、村内か
ら出土した貴重な考古学資料と民俗資
料をわかりやすく展示している。

山添村の歴史は古く、縄文早創期 1
万5千年〜1万2千年前）にさかのぼる。
住居跡や集石炉など多数出土し、考古学



上、最も早くから開けた土地であったことを裏付けている。また、近年の発掘調査でも名張川やその支流各所で縄文や古代の貴重な遺跡・遺物が発見されたものを展示している。

毛原廃寺 けはらはいじ 国指定重要文化財) 山添村の南に位置する毛原集落にある毛原廃寺は、文献にも見られず、発掘調査をしたこともないが、残っている



る礎石の大きさや規模から南門・中門・金堂と考えられる建物を中心に、周辺の地形に制約された七堂伽藍(ひちどうがらん)配置の奈良時代の平城京の大寺院に匹敵する古代寺院であったことがうかがえ、創建年代は出土した瓦から天平初年頃と考えられている。奈良朝国家が当時の仏教政策の一環として建立したものと考えられる。大正15年に重要文化財に指定された写真右は毛原廃寺の大きな礎石の前で王寺の7人。

神野山 映山紅(えいざんこう) 昼食。
展望台からは、松尾芭蕉が生まれた伊賀上野が一望できる。上野城がある小山

や市街地も良く見える。唯一とも言えるレストランで昼食を頂いた。それは、黒豆ご飯、里芋ズイキの酢の物、大根の煮つけ、ごぼうの金平、片平あかねの漬物など100軒オール山菜料理で美味しく満足。続いているコーヒーも大きなグラーの信楽焼コーヒーカップで美味しく2度目の喜びを感じた。

鍋倉溪 なべくらけい) 神野山山腹にあり、大小の黒色の岩々が幅平均25m、長さ約650mにわたり、まるで溶岩の流れのような奇妙な景観を創っている。岩は角閃斑礫岩(かくせんはんれいいわ)という深成岩で、生駒石とも呼ばれている。鍋倉という名称は、堆積した岩が黒くすすけていて、鍋の底を連想させるところからきていると言われ、その伏流水は「やまとの水」百選にも選ばれている。水音はするが、水面は見えない。その為、水を見ることが出来たら幸運とされ、水に関連した言い伝えが多く存在する。



奇妙な黒い岩の川のような鍋倉溪

山添村をぐるりと巡って、村で一つしかない信号の所に戻った時に、「これ山添村を離れ奈良市に入っていきませんが、何か聞くことがありますか」と言われたので、山添村の人たちは、「お茶栽培を含む農業をされていることは分かるが、それ以外で生活の糧になるような事をされていませんか」と聞くと、山添村では、農業はアルバイトで土曜、日曜に行い、主な収入は、平日に奈良、上野、名張などへ仕事に「行っている」とのことだった。ちなみに、「ガイドしていただいた奥谷さんは、元大阪府職員で現在は村会議員。年一回、奈良県立大学で「やまとまほろば学」を教えておられる。」

バスは進み。山添村を離れ、ガイドは奈良市ボランティアガイドの田中さんに交代し、太安萬侶墓へと向かった。

太安萬侶墓 彼がいなかったら、古代史は今のような形で伝わっていなかったかも知れない。「古事記」をはじめ「日本書紀」の編纂にも関わったとされる文官・太安萬侶。その墓が発見されたのは昭和54（1979）年、茶畑の斜面にて、直径約4.5坪の墳墓に納められていたのは墓主を明らかにする墓誌＝写真左＝

京四條四坊從四位下數五等太朝臣安萬侶以癸亥年七月六日卒之養老七年十二月十五日乙巳



をはじめ、火葬骨＝写真右＝や真珠などを

墓誌は現在、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館で常設展示)。41文字からなる銘文には「太朝臣安萬侶」の名のほか居住地や位牌、死亡年月日などが記されていた。奈良時代の上級官人の墓がこのようなに規模や構造、遺物の出土状況などが明らかにされた例は稀である。

息を切らし、急坂を登り切れば、歴史の証人が眠る場所。眼下を望めば、茶畑一面、緑が冴え渡っていた。

近くには二つの天皇陵がある。皇位継承をめぐる政争に巻き込まれないよう酒を飲むなど凡庸を装うが藤原氏が49代に押し立てた桓武天皇の父の**光仁天皇陵**。天智天皇の息子である志貴皇子は、政治より和歌に生きた人で即位していないが、**春日宮天皇陵**と称されている。



バスをJR奈良で降り駅に向かって歩いてみると誰が言うでなく、楽しかった。また行きたいな」と言った。本当に楽しかった、大照寺跡しだけ桜を一緒に見に行けへん」と話が弾んでいた。

【寺ボランティアガイド・三宅茂樹】

ヘリコプターと史蹟、歴史、、、

副会長 石橋 清



3年前、王寺観光ボランティアガイドの会のガイド養成講座の募集があり、地域の歴史の勉強にと軽い気持ちで受講し、その後向う見ずにも会員となってガイドの見習いを始めました。

私は現役時代はヘリコプターのパイロットとして35年間ほど過ごし、その間、主に電力会社の送電線の点検、新設工事、補修工事などを中心に、吉野の銘木をヘリコプター搬出したり、テレビ局のニュース取材など多様な仕事に従事してまいりました。

最終的にはドクターヘリを5年間に亘って飛ばす仕事で終り、最後の最後には東北震災の現場へ飛んだことが大変貴重な経験となりました。

このような人生の中で、歴史や史蹟にはほとんど関係ないと思われることですが、生駒山の麓で育った私は物心が着く小学生のころには、山麓に点在する古墳群の横穴にも

ぐりこんで遊び、土器のかけらなどを自慢げに集めたものでした。

そして学校では歴史好きの先生に恵まれ、直近の生駒山を目の当たりにしながら神武の東征の話に聞き入ったものでした。

その後、ヘリコプターに乗るようになって、歴史と再会することになったのは、高度成長で開発されたり、新しく大規模な道路を建設するときなどには、あちこちで必ず遺跡が発見されて、上空からの写真を撮って、発掘の記録を多くの市町村が調査保管することになったからでした。

当初、小型双発の飛行機に積んで、高い高度から都市、市街地などの測量写真を取っていた RC10 という 100 キロ近い重さの大型カメラをヘリコプターに積み込んで、発掘された遺跡を超低空飛行で垂直写真を撮るといった仕事が始まり、頻繁に飛ぶようになりました。

そして 最終的には、カメラの技術的な発達による小型化と、ラジコンヘリの発達で一挙に市場を奪われるまでずいぶんと遺跡めぐりをさせてもらったものでした。

その後、ヘリコプターにはカナダ製のレーザー光線の計測機器を積み込んで、送電線の活線と直下の支障木の離隔を数センチの誤差で記録するような仕事も可能となる発展があり、同じ機材で箸墓古墳などの樹木を透過した正確な地形を測量するような技術も導入されました。

私の歴史愛好度は本当に気まぐれ、聞きかじり程度で、ガイドの会会員としては恥ずかしいレベルなのですが、今後研鑽に励み良いガイドが出来るようになってみたいものだと思います。